

優しさでより良い世界に

(原文は英語)

イグナツィ・クルチック (12 歳)

ポーランド・コモルニキ村

ヤヌシュ・コルチャック第一小学校

友だちに優しくするのはそう簡単なことではない。僕がストライカーをしているサッカーチームには、すごいゴールキーパーがいる。試合の後は、よく全員でベンチに座り、話をするが、そのゴールキーパーは汚い言葉を使う。僕はそれが好きではない。でもサッカーをするのは楽しいので、チームを離れたくはない。僕はそのゴールキーパーに人の悪口を言うのをやめるよう、どうやって注意したらいいか、とても悩んでいた。「おい、そんな言い方はやめろよ」と言って、僕が笑われたらどうしよう……。この前、メガネをかけているチームメイトがボールに追いつけなかったとき、そのゴールキーパーが彼をバカにしたことすらあった。僕はとても悲しくなった。その子は「もう帰らないといけないから」と言い、目には涙がたまっていた。こうなるともう良いプレイなどできないので、僕も帰ることにした。その次の日、僕は「誰かの気持ちを傷つけたり、ののしったりするメンバーには、サッカーの試合と同じようにレッドカードを出そう」とチームメイトに告げた。笑うメンバーもいたけれど、全員がそのルールに賛成した。ゴールキーパーは、早速そのルールを破ったのでベンチ入りさせられた。退屈した彼は「ごめん」と何度も謝ってきたので、チームは彼にもう一度チャンスを与えることにした。それ以来、ゴールキーパーは態度を改め、メガネのチームメイトとも仲良くするようになった。今回のことで僕は、声を上げたらいじめられるのではないかと怖がっていたのは、自分だけではないことに気がついた。いつまでも意地悪し続ける人はいないけれど、だまっていたら、いじめはなくなる。声を上げるには勇気があるけれど、声を上げれば敵だった人が友だちになる。

冬は午後になると、母と妹のためにラベンダーティーを、父と兄のために特製コーヒーを入れてあげている。お茶の受け皿にはオレンジとクローブをそえ、コーヒーのフォームミルクの上には、シナモンパウダーで「パパ」や「ニコ」と書いて飾りつけをする。それから、家族が一番好きな音楽をかけて、ぜいたくな時間を過ごしてもらおう。誰かを大喜びさせようと考えたら、僕はやる気が出てくる。その人の笑顔が浮かんでくる。そして僕は、一つ面白いことに気がついた。僕が優しくすればするほど、相手も僕に優しくしてくれるということだ。

しかし、いつもそばにいてあげられない場合、助けてあげることがとても難しくなることがある。僕の祖母の場合がそうだ。祖母はアルツハイマー病で、鍵や財布などをいつも探しまわり、病気であることに腹を立てている。そんなことがよくあるので、僕は祖母が物を置き忘れる場所を覚えてしまい、簡

単に見つけられるようになった。僕が学校に行っている間は、叔母が祖母と一緒にいる。祖母は短気を起こすことが多く、希望がもてなくなっている。そこで僕はあることを思いついた。鍵と財布にセンサーをつけて、僕が家にいない時には、叔母がコントローラーのボタンを押すだけでセンサーの音が鳴るようにした。これで祖母は失くしたものを見つけられるようになり、とても喜んだ。大したことではないけれど、叔母も感謝してくれたので僕は鼻が高かった。

本当に特別なことをしてくれているのは僕の母だ。いつもおいしい朝食とヌテラ（Nutella）のサンドイッチを作ってくれる。母にはいつも感謝しているし、自分は感謝されていると母に感じてほしい。母は僕らにいつも、「ありがとう」と言ってくれるのが一番うれしいと言うので、きっと僕の気持ちは伝わっていると思う。僕たちの社会も、僕の家族と同じように心がければ、良くなっていくと思う。「ありがとう」は、たった一言だけれど大きな意味をもつ。

社会とはもちろん、僕と僕の家族、サッカーチームの友だちとその家族、そしてこの地球上のすべての人たちのことを言う。誰かが苦しんでいる時には、声を上げよう。人に何かをしてあげよう。また、何かをしてくれた人には感謝をしよう。そして、できる限り誰かを助けるようにしよう。良い行いは、いつか自分たちに返ってくる。こうしたことは、優しさがあればできると思う。